

派遣者番号	R 5 K 2 7	氏 名	長坂 光一郎
研究主題	自分の学びに見通しをもち、振り返りを生かして 主体的な学びを進めるためのデザイン		
派遣先大学	早稲田大学	指導担当者	酒井 徹
所属	世田谷区立烏山小学校	所属長	廣石 雄司

キーワード： 主体的な学び 見通し 振り返り 学習計画

要旨： 本研究は、小学校社会科における授業実践を通して、子供たちが自らの学びに見通しをもち、振り返りを生かして主体的に学びを進めるための授業デザインを検討することを目的とした。主な研究方法としては、①先行研究に基づき、主体的な学びに必要な要素を検討すること②第4学年の社会科「防災」単元で授業実践したこと③授業前後のアンケート調査と抽出児童の学習記録を分析したこと④授業デザインの考察と今後の課題・展望を検討したことの4点である。これらを基に、①学習計画を子供と一緒に作成し、学習アプリなどを活用することを通して、子供たちは学習内容や方法の見通しをもつことができた。②振り返りを通して、子供たちは自身の学びを客観的に捉え、次の学習への意欲を高めることができた。③授業後のアンケート調査では、すべての項目で主体的な学びの指標が向上した。特に、見通しをもつことに関する項目は、大幅に上昇した。④教師は、子供の意見を取り入れ、学習内容や方法を柔軟に調整することで、主体的な学びを促進することができる。という結果が出た。また、課題としては、3点を挙げる。①他の単元や教科、学年でも同様の効果が得られるかどうか。②子供が学習内容をどこまで調べ、どのように考えるかについての基準を設定する必要があること。③集団効力感を高めるための授業デザインについて考えること。そして、今後の展望としては、形成的評価とフィードバックに重点を置き、子供の主体的な学びを促す授業デザインの研究を続けていきたい。

1 課題設定の理由と研究の方向性

1-1 問題の所在とテーマ設定の理由

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）では主体的・対話的で深い学びの実現を求めている。平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申では、観点別評価について「関心・意欲・態度」から「主体的に学習に取り組む態度」に改めるよう求めた。その理由として、従来の観点では、「挙手の回数やノートの取り方など、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解が払拭し切れていないのではないか、という問題点が長年指摘され現在に至る。」ことが挙げられた。また、「子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。」とも示された。小坂（2021）は「今までの『関心・態度・意欲』のように一人ひとりの教員の価値観による絶対評価にならないように、注視していかなければならない。」とし、豊田（2020）は「自らの学びをコントロールしていることが『主体的な学び』であり、その視点で授業を改善していくことが今回の学習指導要領の趣旨であると解釈する。」と述べた。これらを基に、主体的に学習に取り組む態度に着目した上で、見通しと振り返りに焦点化して実践を行った。子供が「何を学ぶのか」といった内容の見通しをもった上で、「どのように学ぶのか」と方法を選択し、その内容や方法を振り返っていくことで、次の学びへと生かそうとする子供の姿を明らかにすることを目的とする。同時に教師の関わり方について評価や授業改善をどのように行っていくべきなのかを、授業実践を基に分析していく必要があると考えた。

1-2 実践学年の子供の実態

研究テーマに迫るために、公立小学校の第 4 学年における社会科の授業通して実践と研究を行った。子供の実態を捉えるためにアンケート調査を行い、教員からは社会科の授業における不安などの聞き取り調査を行った。

子供のアンケート調査では、9 項目の内、7 項目において、肯定的意見が 70%以上であることに対し、しかし「次に何を学ぶのか、自分なりに見通しをもって学ぶことができる。」の項目は 52%であり、他の項目と比べて顕著に低いことが分かった。

1-3 実践校での教員の実態

当該の小学校においては、「教師主導の学び」から「学びを子供に委ねる」ことを目指している。中学年担当の教員からは「資料提示のタイミングや読み取らせ方が難しい。」「学習問題や学習計画を子供と作る具体的な方法が知りたい。」など、社会科の指導方法に課題があることが指摘された。また、「教科書の内容を全て教えなければならない。」という意見があった。その背景には、教員自身が学生時代に学んできた「社会科＝暗記」というイメージをもつことも否めない。

つまり、今回のテーマの一つである「主体的に学ぶ子供の姿」を具現化するためには、教員が自ら旧来の授業観を変革していく必要があるのではないかと推察できる。

2 研究の方法

2-1 先行研究について

(1) 子供が見通しをもち振り返ることで主体的に学ぶことについて

関田・森川（2019）は「『次につなげる振り返り』をほぼ毎回の授業に組み込むこ

とで、学習者の主体性を喚起したい」とした上で、自己の学習の振り返りが主体的な学びを促すとしている。野本（2018）は「問題解決への見通しは、何を調べるか、調べる方法は何か、どういう順序で調べるか、どのようにまとめるかということを考えさせながら学習計画を立てることで、見通しを持つことができる。こうすることで、単元を通して児童自ら連続した問いを持って主体的に問題解決学習に取り組むことができる。」と単元を見通した学習の重要性を説いた。伊藤（2022）は「『主体的な学び』は極めて複雑な学習の現象であり、学習目標、学習方略、自己効力感を初めとした様々な心理的要素と、教師や仲間をはじめとした教室環境との相互作用によって成り立つものである。」とし、鹿毛（2013）は「特定の課題ができるという自信が、努力の意識を高め、効果的な学習方法の活用を促進することを通して学習意欲や学習成果を高める可能性がある」と説明した。また、B. J. ジーマーマンは（1997）は「生徒が示された学習目標を受け入れたり、自ら設定したりしたときには、それを達成するための効力感が増大し、学習が進むことによってそれはさらに強力になる。」と主体的な学びには、学習意欲や自己効力感を高めることが必要であることを述べている。

(2) 子供の主体的な学びを支える教師の関わりについて

高橋ら（1991）は体育科の研究において「学習成果に強く関係するのは相互作用行動であり、特に子供の運動学習に対する賞賛、助言、励ましは、授業の雰囲気をよくし、学習成果にも肯定的に作用する。」と報告している。また、授業を構成するものとして、山本（2012）は、「形成的フィードバックについて教師が理解を深め、授業で活用できるようになることが望まれる。」と教師の役割の重要性を述べ、また、形成的フィードバックの特徴として「学習の改善のための情報をもどす」が必須であり、「すべての根底にある。」と、授業中における賞賛等がもたらす効果や、授業改善に生かすための形成的フィードバックについて説明している。さらに、淵上ら（2006）は集団効力感に関し、Bandura の論文を参照し、「Bandura（1997）は、集団レベルにおける効力感の重要性について指摘している。集団や組織において、自分達集団メンバーは、問題を解決し継続的な努力を通じて活動を改善できるという、集団の効力感に関する感覚が存在することを示唆している。」と指摘し、「課題解決に関わる集団であるチームの形成やパフォーマンスの向上のためには、集団としての効力感が大切だ。」とも述べている。つまりこれらを授業のデザインに組み込んでいくとすれば、問題解決的な学習を進めるにあたって、集団効力感を高め、授業改善や評価のために形成的フィードバックを行う教師の手だてをとる必要があると考えた。

3 主体的に学びを進めるための授業デザインについて

① 導入の工夫

課題把握（つかむ）では、災害年表、白地図を活用し、昔から災害が起きていること、東京都の広い範囲で様々な災害による影響があることをとらえられるようにした。その中でも水害や地震は子供たちにも身近である。今年に関東大震災から 100 年が経過した節目の年でもあり、地震に着目して追究できるようにしていく。

② 学習計画の工夫

学習計画を作成する際には、学習問題を立てる際の疑問や、学習問題に対する予想を

活用する。大きな視点として「人々の対策（災害への予防）」を調べていくことを確認し、「都」、「区」、「自分たちの住んでいる地域」（以下「地域」と示す）のそれぞれの立場でどのような対策をしているのかを調べていくことを確認できるようにした。また、調べる内容だけでなく、調べ方やまとめ方なども計画をし、単元を通した見直しをもてるようにした。

③ 見直しをもち振り返るための工夫

ロイロノートを活用し、予想や疑問、学習問題、学習計画、各時間の振り返り、各時間の関連図、単元のまとめなどを取り入れ、単元の学びを子供自身が一覧できるようにする。次の自分の学びはどのような内容なのかを見通すことができるようにした。

④ 単元構成の工夫

追究場面（しらべる）では、ロイロノートを活用し、子供自身が「何を調べるか」を明確にした。「都」、「区」、「地域」といった3つの地域区分について、計4時間で調べるように設定することで、学習問題を解決するためほどの程度進んでいるのか、自分の進捗状況を把握できるようにする。また内容について、重点を決めるとともに、時間配分などを意識させながら取り組めるようにした。

4 研究の方法と授業実践の考察

4-1 授業実践の考察

授業前のアンケート調査から明らかになった、学びの見通しがもてていないという課題に対し、抽出児童の振り返りの記述から、問いや教材、学習活動に対して自分からすすんで関わろうとする姿が見受けられた。これから必ず起こるといわれている首都直下型地震を教材としたことで、単元の最後には「今まで避難訓練は少しめんどくさくて、『（避難訓練は）役に立つかな？』などと考えていたけれど、これを調べたあとは少しでも逃げ方をシュミレーションしたほうがいいなと思ったので、これからは真剣にやろうと思います。また、区民センター前とかでもやっている防災訓練などに参加してみようかなと思いました。」と、自分事として考えることができたものと推察される。また、都、区、地域のそれぞれの対策について調べる際には、自分で問いの解決のための順序を選択し、関連付けながら学び進めている様子も見られた。「何を学ぶべきなのか」が学習計画によって明らかになり、学び方（学習方略）についても十分に理解していたからだと考える。また、個別に追究しながらも、友達を意識し、集団として学ぼうとする態度も育っていることが分かった。

4-2 アンケート結果からの考察

授業後では、全ての項目でポイントが上昇した。特に「次に何を学ぶのか、自分なりに見直しを持って学んでいる。」に関しては事前アンケートと比べて52%→93%となり、41%の上昇がみられた。

これらのことから、主体的な学びを進めるための授業デザインを実践していくことで、子供たちが見直しをもって自らの学びを進めることができるようになることが分かった。

教師主導ではなく、子供の意見から授業をつかっていったり子供に学びを委ねたりすることで、子供自ら、よりよい学びにしていこうとする姿が見られたのではないかと推察できる。

5 課題と今後の展望

5-1 課題

今回の授業形態が他の単元や教科及び、他の学年でも効果を示すかどうかについては、さらに検証が必要である。また、今回は、単元の学習内容についての見通しはもてていたが、学習内容をどこまで調べるのかについての基準は示していない。子供が問いを追究するために、「調べる」「考えて話し合う」といった小学校社会科に必要な学習活動を明示し、学習内容についてのルーブリックを示すべきであったとも考えられる。

先に示した、授業後のアンケート調査では、「次に何を学ぶのか、自分なりに見通しをもって学ぶことができている。」ことに関して、実践前と比較して肯定的意見の割合が大きく向上した。しかし、残り7%の子供たちにとっては、手だてについて課題が残る。今後は「見通しをもち振り返るための工夫」として、今回の手だてをより良いものにするために改良していくとともに、子供が見通しをもったり振り返ったりできる方法を自分で選択できるようにしていく必要がある。

また、集団効力感については研究に着手した段階に留まっていることも課題と理解している。

5-2 今後の展望

子供が主体的な学びを進めるための授業デザインの一つの側面として、今後は、「形成的評価とフィードバック」に重点を置き研究を続けていきたい。単元の構想に、教師の役割を位置付け、どのように形成的評価をすれば、より主体的な学びを促すことができるのかを明らかにしていきたい。

また、授業を通して集団効力感を高めるための授業デザインも考えていきたい。そうすることで、個人だけではなく集団として授業に向かう姿勢が高まるだろうと推察できるため、今後も研究と実践を続けていきたい。